

第二十五回中央図書館貴重文物展観目録

九州大学附属図書館中央図書館

<https://doi.org/10.15017/1485135>

出版情報：大学広報. 538, pp.1-6, 1985-04-30. 九州大学広報委員会
バージョン：published
権利関係：



大学広報

№.538

昭和60年4月30日発行

(編集)

九州大学広報委員会

第二十五回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

西欧農学古典文庫の解題 一独書1一

はじめに

展観に際し教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、今回の展観資料の選定、解説、配列等については本学岩片磯雄名誉教授に御指導御尽力を頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

記

展観場所 : 中央図書館メインロビー

展観期間 : 昭和60年5月2日(木)から

昭和60年6月29日(土)まで

展 観 資 料 の 解 説

1. Justi, Johann Heinrich Gottlob von (1741–1791)–Staatswirtschaft oder systematische Abhandlung aller ökonomischen und Kameralwissenschaften, 2 Teile, Leipzig, 1ste Aufl., 1755; Neudruck der 2te Aufl., 1758, Neudruck, 1963.

著者は Thüringen に生まれ、Jena で学び、長じて Wien の大学で経済学の教授になった。彼の代表的著作はここに展示したのと同じ表題で、初め 1755 年に出版されたが、1758 年に同じ題目で内容を著しく充実させて出版した。それを近年再出版したのが、ここに展示したものである。

表題の Kameralwissenschaft とは、ドイツ型・内陸型重商主義政策学のことで、自国内の農・林・工業の発展に重点をおいて、王室財政の充実を図ることを主眼とする政策体系である。したがって一般重商主義にもまして、絶体王権ないし警察国家(Polizeistaat)の体制構築を企図するとともに、王室財政充実の基本手段として、彼の場合、主に農業の発展を図る体系をとっている。本書の表題で ökonomisch というのは、今回展示してある Thaer が注意したように、多分に「農学的」の意味である。ドイツ・カメラリズムは前期と後期に分けられるが、著者の体系は後期に属し、慣行的農学に対して実験農学を主眼としている。

2. Reichart, Christian (1685–1775)–Land = und Garten =Schatz, 6 Teile, Erste Aufl., Erfurt, 1753–55; Neue Ausgabe od. 7 te Aufl., Stuttgart, 4 Teile, 1821.

著者は「中部ドイツの Erfurt に生まれたが、間もなく父は死に母は再婚した。義父はこの地に広大な土地を所有し、自ら農業にたずさわるかたわら、子供の教育に意をつくした。Reichart は初め法学を学んだが、やがて自ら農業を行うと同時に、市政にも参与し、後に Göttingen の「王立協会」(Königliche Gesellschaft)の会員に推挙された。

全 6 冊からなる本書の初版は、内容の重複その他不備な点が多かった。これを Erfurt 大学の農学(Oekonomie)・工芸学および官房学(Kameralwissenschaft)の教授であった Dr. Hieron Ludw. Wilhelm Völker が 4 冊本に編集し、1821 年に改訂版として出版した。ここに展示したのは、この 4 冊本の中の第 1 巻と第 3 巻である。

本書は「農業および園芸宝典」と題されているが、全体として園芸的に考察され、農耕に関する視野を欠き、家畜についての配慮に乏しく、大量の施肥によって休閑を無くしうることを述べているが、それに伴う大きな費用を考慮していない。このように経営的配慮を欠いているという意味で、後期カメラリズムの典型的文献と言えよう。

3. **Bermiller, W. F.** (生没年次不詳) — **Der kluge Landwirthe, eine Geschichite unser Zeiten, oder Kurzgefasste Unterricht von der Landwirthschaft nach ihrem ganzen Umfang, München, 1791.**

17世紀から18世紀前半にかけてのドイツ農書の多くは、ドイツ固有の「家父学」(Hausväterliteratur)に属するが、18世紀末にもこの種の文献が出ている。本書もその一つである。聖職者の手による「聡明なる農業者—農業に関する簡易教書」とでも訳すべき本書の第1部は農業、第2部は宗教となっている。第2部では「神は霊界のものだが、現世の神こそ君主(Landesherr)である」とし、平素健康に留意して労働能力を鍛え、万一の場合は学習した薬草で治療に務める。こうして賦役に際しては監督の眼いかにかわらず、誠実に働き、労働の効果を高めるために、第1部で説いた農業の教えに従って働くべきことを述べたもので、強固な封建性を背景にして、宗教論・医学・薬学・農学などが一体化して説かれている。

4. **Hermann, Anton** (生没年次不詳) — **Landwirthschafts = Katechismus, 3 Theile, Erster Theil, Freiburg u. Konstanz, 1811 ; Zweite, Freiburg, 1816 ; Dritte, Freiburg, 1817.**

本書第1部は農耕、第2部は採草地および飼料作物栽培、第3はホップ、タバコその他多くの工芸作物栽培について記述したもの。表題の Katechismus は元来カトリック教における宗教問答の意味で、本書もそれに準じ、その理由如何を問わず、例えばホップはこうして栽培すべきものといった形で、問答形式で書かれたものである。

5. **Der practische Ackerbau von R. W. Dickson herausgegeben von A. Thaer, 2 Bde, Berlin, 1807.**

原著 R. W. Dickson - Practical Agriculture, 2 vols, London, 1805 (本文庫に所蔵)は副題の「耕作方法ならびに家畜管理を内容とした現代農業の全組織」が示すように、イギリス農業革命がほぼ完了したころ、「体系的農学」を実証的に取纏めた、恐らく最初の書物である。その中でも巻頭の「犁および犁耕」の項や、後半の「休閒および芝土焼却(paring and burning)」の項など、なかなか具体的には理解しにくいことをよく解説した点で、日本の読者にとっては特に貴重な文献である。だが18世紀初頭の A. Thaer もまた同様の感をいだき、イギリス農業に関心をもつドイツの読者のために、これを編訳して出版した。本書の何よりの特徴は、新しい農具や農耕法のイギリス名を、適格にドイツ語に訳した点で、今回展示してある Thaer の主著「合理的農業論」の中のドイツ語の用法も、予め本書を熟読しておくことによって、よりよく理解できよう。

6. Thaer, Albrecht Daniel von (1752–1828)–Einleitung zur Kenntniss der englischen Landwirthschaft. 3 Bde., Erster Band, Hannover, 1798; Zweiten Bandes, 1801; Dritter und letzter Band, 1804.

本書は Christian Reichart – Einleitung zum Acker - u. Gartenbau, 1759; Johann Christian Schubart – Oekonomisch-Kameralistische Schriften, 1783–85; Johann Christian Bergen – Anleitung für die Landwirthe zur Verbesserung der Viehzucht, 1781 等、後期カメラリズム = 実験農学派の人たちが、先進国イギリスの農業を視察し、農学文献を読みながら、専ら翻訳書に頼ったために、真意を把握できなかったとし、ことさらイギリスを訪ねることなく、尨大なイギリスの文献を原著で読破し、当時の英語・ドイツ語の関係では、容易に独訳できない用語が沢山あった事実在省み、懇切な説明を附してイギリス農業の進歩の全貌を叙述した著作で、どの英書よりもイギリスの当時の状態をよく解説したものとされている。ここには 2 冊だけを展示したが、「合理的農業論」とともに、Thaer の二大傑作の一つとされる。

第 2 巻、S. 22 の図はイギリスの深耕犁を図示したものの。

7. Thaer, Albrecht Daniel von – Grundsätze der rationellen Landwirthschaft, 4 Bde., Berlin ; Bd. I, 1809; Bd. II, 1810; Bd. III, 1810; Bd. IV, 1812.

本書は「近代農学の祖」と呼ばれる著者の代表作で要約すれば「輪栽農法」(Fruchtwechselwirthschaft)の合理性を説いたもの。この 4 冊本の初版は出版部数が少く、著者名を印刷せず、von の下に自身で署名している。本書は出版とともに多くの国々で翻訳されたが、英訳書を例にとれば、原著者の意図を汲みとるのは不可能に近い。

本書は農学の最初の体系化であるのみでなく、植物栄養については、Tull の土学説のあとをうけて「腐植学説」を説き、家畜栄養については「乾草価学説」を創始したものであり、しかもこれらが農学体系として一体化されている点に重要性がある。

見開きの第 4 巻 S. 452 ~ 3 は総面積 1450 モルゲンの農場で旧来の三圃式を採った場合の各国の収量などを示したもので、次の頁には輪栽式の場合が示されている。

8. Thaer, Albrecht Daniel von – Versuch einer Ausmittlung des Rein – Ertrages der productiven Grundstücke, 1ste Aufl., 1812; Neue unveränderte Aufl., Berlin, 1833.

全体が 2 部に分かれ、第 1 部では農地の位置ならびに地形に応じた純収益のあげ方、第 2 部ではプロシア国家の共有地分割令について述べている。著者は共有地制の下では、農業改良は不可能だとしたのである。

9. Thaer, Albrecht Daniel von – Leitfaden zur allgemeinen landwirthschaftlichen Gewerbs - Lehre, Berlin, 1815; 2te unveränderte Aufl., 1836.

全巻を労働・資本とその投下・土地・農場・地力の維持培養・経営方式・経営管理および経営能力、そして最後に簿記について述べた入門的小著で、後に「農業経営学」と呼ばれるものの最初の体系化である。その背後に名著「合理的農業論」の裏付けがある。

10. Thaer, Albrecht Daniel von – Geschichte meiner Wirtschaft zu Möglin, Berlin, 1815.

長くドイツ中部の Niedersachsen の Celle で農業の研究と教育を行ってきた著者に対し、「合理的農業論」の刊行と寄贈が契機になって、プロシア国王が自分の領内の Möglin に広大な土地を提供し、そこに移って研究・教育を進めるよう勸奨し、それに応じてこの地に移った著者が、最初の10年間のこの地の土壌状態と経営実績とを記録したものだ。

11. Thaer, Albrecht Daniel von – Grundsätze der rationellen Landwirthschaft, Neue Aufgabe, herausgebt von Guido Krafft, C. Lehmann, Albrecht Thaer u. H. Thile, Berlin, 1880.

テーヤの「合理的農業論」は出版以来諸外国でも翻訳刊行されたが、ドイツでもしばらくは版を重ねた。けれどもやがて信頼できる版の入手が困難になり、加えて術語の用法も変ってきた。こうした事実省みて一冊本として再版されたのが本書である。編者はいづれも著名な農学者・農業経営学者であり、編者の1人 Dr. A. Thaer は原著者の孫である。これらの人たちが要所所に必要な註解を加えているだけに、本書はそれなりに貴重なものである。左側はテーヤの肖像。

12. Friedrich, Herzog zu Schlesswig-Holstein-Beck (生没年次不詳) – Ueber die Wechselwirthschaft und deren Verbindung mit der Stallfütterung des Nutz- und Arbeitsviehes, 1ste Aufl., 1803, Leipzig, 2te Aufl., 1814.

本書は輪栽式農業に加えて家畜の周年舎飼の合理性を唱えたもので、当時としては極めて斬新な所見で、Thaer もこれに賛同して「合理的農業論」の中で本書を引用した。

本書はまた当時の Gutsherr の農場における賦役労働の不合理な実態をリアルに描き、農政改革の緊要なことを説いた。

- 13. Schwerz, Johann Nepomuk von (1759–1844)–Anleitung zur Kenntniss der Belgischen Landwirthschaft, 3 Bde., Halle, Erster Bd., 1807; Zweiter Bd., 1808; Dritter Bd., 1811.**

ドイツ西部の Hesse 州に生まれ、長じて伯爵領の管理人となり、1802～10年の間ベルギーその他各地の農業を視察した。それをもとに「グルントヘル制」(Grundherrschaft)の多い西部ドイツが師事すべきものとして、「ベルギー農業論 3冊」をまとめた。ここには初めの 2冊だけを展示した。

右側の図は犁耕と畦立ての仕方を示したものである。

- 14. Koppe, Johann Gottlieb (1782–1863)–Unterricht im Ackerbau und in der Viehzucht, 1ste Aufl., 1812; 10te Aufl. durchgesehen und mit Zusätzen herausgegeben von Dr. Emil v. Wolff, Berlin, 1873.**

著者は日雇労働者の息子として生まれ、やがて伯爵領の見習い農夫となったが、その才能のゆえにやがて管理人に登用された。そして旧来の三圃式を輪裁式に切替えて、大きな成果をあげた。これがきっかけとなって Thaer に認められ、Thaer がベルリン大学に出講の折は、メークリンの農学校で農業教師を勤めた。こうして本書ができあがったが、1829年版の序文の中で、旧来のグーツヘル的＝農民的諸関係がプロシアの農政改革によって廃棄されることを、大きな喜びをもって期待した。左側は著者の肖像。

- 15. Gericke, Friedrich Carl Gustav (生没年次不詳) –Praktische Anleitung zur Führung der Wirtschafts-Geschäfte für angehende Landwirthe, 4 Bde., Berlin, 1804–1815.**

1804年に出版された第1部の巻頭には、Albrecht Thaer による合理的農業のあり方についてはかなり長い解説的序文が書かれ、これに第1部の題目として「養畜について」が述べられている。1811年出版の第2部は「土壌または表土の耕作」、1815年の第3部は収穫・収納・貯蔵および採草地における乾草収穫ならびにブドー酒、ビールの醸造、食酢製造について述べている。

更に第4部では先づ各種の三圃式、次いで四圃式について述べ、合理的農業に必要な諸条件について解説している。